



No.333

# 理科の楽しみとは

私は以前、理科の勉強法について書いたことがあります。今少し見方を変えて理科という教科を見てみます。

私は中学生のころからバイク(オートバイ)に興味があり、学生時代を含め、かつては一日で500kmを超える長距離ツーリングをよくしていました。スピードを出すと気持ちがいいというより、空気というものがこんなに固いものかということを知ったのもその時です。こんなことから、「バイクはどうして動くのだろう?」なんて疑問も沸きました。よくよく調べてみると、バイクのエンジンは人間の心臓が血液を流すのと同じように、燃料となる気体を流していることを当時知りました(もちろん正確ではありませんが)。



音楽についても興味があり、最初は音楽をよく聴いていました。聴くだけでは飽き足らず、その次は音楽を実際に演奏する、そして、音楽を作るといふこともしました。さらに、音そのものに興味がわいてきて、音がどのような仕組み

みになっているのかも知りました。それは高校数学で扱う三角関数を駆使することで、コンピューター上で楽器の音を再現できることを知りました。私自身がその楽器の音を再現できたときの感動は今でも忘れません。

理科は本来自然のあらゆる現象を考え、解明していく学問であり、数学の力を借りることも必要になりますが、それらを利用し融合させることで様々な現象を解明し、さらに、今まで想像上だった様々な世界を現実のものとする事もできます。また、想像さえできなかった世界を現実のものとする事も理科という教科(学問)の可能性の部分です。その結果が今私たちが普段あまり意識することのない、この恵まれた文明社会であり、きつとこの先、想像もできないことを現実にしていくことがあるでしょう。

今身近にある理科という学問の結晶は、理科というものを感じさせることなく、複雑極まりないものになっているのも事実です。現在隆盛を誇るスマートフォンに疑問を持つことは、逆にストレスになるほど複雑だと思えます。だから身近な理科の不思議は大切になります。

創学舎では去る5月に小学

6年生対象の理科の実験教室を行いました。そのときの子供

たちはとてもいい表情をしてい

ました。複雑になった理科の世界とは対照的に、



あまり経験したことのない現象を目の当たりにすることで、そこにいるみんなとその感動を共有でき、以前より少しは理科に対しての興味も持つてもらえたようでした。

普段理科の苦手な生徒が多い中、できる限り身近な形でのアプローチを増やしていければ、理科に対する苦手意識を少しでも減らすことができ、「ちよつと勉強してみようかな。」と思ってくれる人も少しづつ増えていくと思います。

(岡本)

# 失敗から学んだこと

「努力は人を裏切らない」という言葉があります。とても素敵な言葉ですが、この言葉は正確ではないと私は思います。例えば、英検の取得を目指す人が一生懸命腕立て伏せをしても努力は裏りませんし、プロ野球選手を目指す人が1日5回素振りをしたつてきつと夢は叶いません。つまり、「裏切らない努力」には「目標に対し、適切な方法であること」と「目標に見合った量であること」の2つが少なくとも必要になるのではないのでしょうか。

私は中学時代、野球部の主将として

春の県大会準優勝、夏の県大会優勝という成績を残し、多くの野球強豪

校から誘いを受けました。優勝旗を持った姿が



地方紙の一面になったり、地元で優勝パレードをしたりとスター気分でした。(なーんだ、自慢話かよ、と思ったあなた。すいません。ちゃんとオチはあります。)

誘いを受けた中から一番気に入った強豪校を選び、進学。そして1年生からレギュラーに……といきたいところでしたが、人生そんなに甘くはありませんでした。部員は100人、しかも半数以上が野球でスカウトされたメンバーの中で試合に出るのは容易ではありません。「試合に出られないかもしれない」という不安から私は全体練習後3時間、毎日自主練習をしました。このとき私は誰よりも「努力」をしていましたが、内容がお粗末。目的意識がなく、ただ漠然と作業を繰り返すだけ。

「努力」は不安な自分を守る精神安定剤のようになっていました。こんな漠然とした努力を続けていた私の身体は、入学から1年経ったところに壊れました。ある朝起きたら、右腕が自分の肩より上に上がらなくなっていたのです。その数か月前から痛みはありましたが、当時の私に休む勇気などありませんでした。医師の診断によると右肩の疲労骨折(骨に穴が開いてました)と右肩鍵盤断裂(ソフトバンクの斉藤和巳と一緒に)でした。全治半年で4か月は右腕使用禁止。顔を洗うの



も左手一本だったのでニキビが増えました。

ここで冒頭に話を戻すと、私の努力は「量」は問題ありませんでしたが「方法」に問題がありました。この出来事から私は練習の「方法」「質」の大切さを学び、多くの方の支えに助けられながらリハビリを経て、3年の春にスタメンを獲得し、甲子園、国体とメンバー入り出来ました。

現在のみなさんの部活の練習は、そして勉強はいかがですか。私の経験が少しでも皆さんのプラスになれば幸いです。(高寺)

### 親が口うるさい理由④

●受験生の親は、いよいよ口うるさくなってきた。「勉強しなさい攻撃」は日に日にその威力を増す。その攻撃をうける子供は、実は勉強がうまくいっていない。当然だ。うまくいっていないから攻撃されるのだ。子供の側に立てばうまくいっていないことは本人が一番よくわかっている。自己嫌悪の気持ちで一杯だ。そこへ、親は痛い所をついてくる。傷口に塩をすりこむようなことを平気で言う。もうがまんできない。何もかもいやだ。  
●いやいや、受験生は大変だ。受験生の親も大変だ。両方とも正しいから余計大



変だ。正しいことと正しいことの衝突だから結論が出るまで大変だ。結論が出て、それをひきずる親とひきずる子供の間もつと大変だ。

とにかくがんばれば受験生、がんばればお父さんお母さん。

●さて前号で、親は自分の子にプロ野球選手など0.001%の確率の成功ではなく「一定の努力をすれば得られる可能性の高い成功」を期待すると述べた。そして、親自身がここまで生きてきてつかんだ、働くことの意義、生活が成り立つことの大事さに触れた。大半の親は、「心身とも健康で、安定した人間関係を持ち、一定の努力をして、ある程度の学歴を得て、自分に合った職につき、安定した収入を得て、生活をしていく」ことを望んでいるのである。実に素朴で単純な願いなのである。これは、子供にとって何の魅力もないかもしれない。また、小学生がこうしたことを真顔で語れば、それはそれで問題であろう。しかし、ともかく親の願いは、いつの世も素朴で単純なものであった。例えば江戸時代の農村であれば「一人前の百姓になって、代々の土地を守り、家族を養っていくこと」が最大の願いだった(もつとも、これは長男のみ可能で、土地をもらえぬ次男、三男は寄生するか、流れていくしかなかった)。  
●親はきみのことが大好きで、きみが喜び、きみが成長し、きみが活躍し、きみが安定した

人生へと進むのをただただ見たいのである。そのため、身の周りの世話をし、食事を用意し、しつけをし、塾の費用を出し、学費を出すのである。きみがやりたいというから習い事の費用も出し、部活の用具も購入するのである。きみが喜ぶから、世間なみに、ゲームを買ってあげたり、遊びに行ったり、お菓子を買ったりするのである。それはいつの時代も変わらない。



●そして親が口うるさいのは、いつの時代も同じである。変わったのは、どの部分に対して口うるさいかである。今の時代は、最低限のしつけと人間関係がクリアできていれば、口うるささは、中学生ともなれば大半が勉強へと向く。しかし、これは、歴史の上ではつい最近のことだ。昭和20年代〜40年代ぐらいまでは、「人に迷惑をかける」「礼儀を守る」「自分のことは自分でする」など、人間としての基本的なルールを身につけることへ意識は向いていた。近所のおじさんおばさん達もそこにはうるさかった。親の関心が勉強へと向いていなかったわけではないが、「うちの子は勉強はダメだから、手に職をつけさせます。何とかなるでしょ。」「あの子は、性格はいいので、真面目にやるから大丈夫。」というようなセリフが安心して聞けて、言える

ような時代だった。実際、社会もそれを受け入れるだけの緩やかさをもっていたのも事実である。

●そして、時代が変わり。親の意識も変わった。今は、雇用が保障されない時代である。ある大学の就職率98%といっても、中身をみると、半分が非正規社員だったりするのが珍しくない(大学別の就職率はここで見なければならぬ)。ある程度のレベルの大学でないと、安定した企業への就職は無理ではないが、かなり厳しくなるのが現実である。高卒で就職する人もいるが、これも現場の話を知ると、正社員は成績の良い人から決まっていき、半分近くが非正規雇用になってしまう場合もある。親は、特に父親は、こうした現実をある程度、人によっては詳細に知っている。だから、勉強はしっかりとやっておけということになる。  
●また、親自身が、勉強をがんばった、親自身がある程度の学歴を有している、一族に高学歴が多いなどの事情があれば、自分の子供への期待度も高くなる。  
(小林健)



▼▲継続希望の方へ▲▼  
▶卒業や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。  
▶在籍していた教室までご連絡下さい。